

# 地方創生と伝統行事

## —土地の記憶を行動で共有する—

### ⑥「宇和島の八ツ鹿踊り」(後編その1)

専門職 平沼 浩

#### 目 次

- |                       |         |
|-----------------------|---------|
| 1.はじめに                | 4.シカの生態 |
| 2.宇和島の八ツ鹿踊り           | 5.鹿と日本人 |
| 3.シカとシシと獅子<br>(以上、前編) | 6.まとめ   |

前号の前編では、愛媛県宇和島市に伝わる八ツ鹿踊りを紹介した。旧宇和島伊達藩の城下町で除災招福を目的に行われてきたこの伝統芸能は、8人の鹿に扮した少年たちの透き通った歌声と軽やかな締め太鼓の音色、萩や紅葉やススキをあしらった伝統衣装が、独特の間と抑制のきいた所作と相まって、秋風の中に爽やかで心地よい余韻を残すのである。

また、そのルーツとされる岩手県・宮城県に伝わる鹿踊りとは、催される時期も目的も風貌も大きく異なる点で興味深いものがあった。



八ツ鹿踊りのヒロイン。筆者撮影（以下同じ）

それにも増してこの取材を通じて、筆者が強く再認識させられたのは、次の3点である。

- ① 鹿を題材にした伝統芸能が、点ではなく広域の面として存在していること
- ② 鹿という文字が、実に多くの地名や人名に用いられていること
- ③ 他方、多くの日本人にとって鹿は身近な動物ではなくなりつつあること

①と②は、鹿と日本人の古くからの関わりを窺わせるのに対して、③は、それとは逆方向に進行中の現実である。特に農林業と無縁の都市や都市近郊の生活者にとって多くの場合、身近な動物と言えばペットの犬や猫であり、肉と言えば切り身のパックであり、動物園の主役の座は海外勢に占められている。奈良市の奈良公園のような特定の場所を除けば、鹿との関わりは希薄化するばかりである。

伝統行事にとって伝統の継承者が最も重要な基盤であるのは言うまでもないが、伝統行事を先人の生活文化を映し出す無形文化の記憶再生装置と見立てるなら、それを温かく見守る側の記憶も重要な文化基盤であろう。

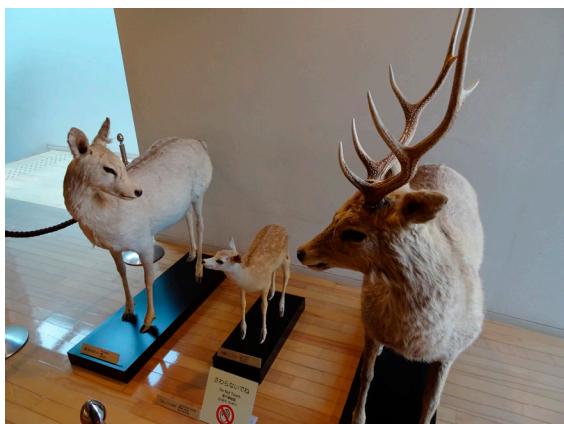
そこで後編では、鹿を題材とする伝統芸能の背景を幅広な視点から掘り下げる。まず、生物としてのシカの生態を明らかにし、次に鹿と日本人の関わりを鹿の3つの側面、すなわち、狩猟（実用）獣、害獣、靈獣を中心実例をあげて考察する。なお、この3側面は、『日本民俗学大辞典 上』（1999）の「鹿」の記述を参考とした。

#### 4. シカの生態

シカは誰もが知る動物である。その姿形はイメージしやすく、俊敏さやジャンプ力を持ち、糞が黒豆状であることも広く知られる。

しかし、どのように生まれ、どのように成長して繁殖するか、生物としてのシカの生態となると、関心の度合いによって知識に濃淡が生じる。ハンターや鳥獣被害に悩まされる農林業の従事者等を別とすれば、一般的にシカの生態を知る差し迫った理由は乏しい。

ここでは、主として生態学者である高槻成紀の『シカの生態誌』（2006）を参考に、生物としてのニホンジカの生態を紹介する。



宮城県仙台市の富沢遺跡保存館「地底の森ミュージアム」で来館者を迎える鹿の親子（はく製）。同館地下のドーム空間には、約2万年前の湿地帯が保存されており、人が残した焚火の痕跡と石器を加工した痕跡とともに少し離れた所に鹿の糞の化石が確認できる。地上には、約2万年前の森が復元されている。同館と道1本隔てた地名は鹿野3丁目であり、都市化した周辺のマンション名にも、鹿野という文字が見える。

#### (1) ニホンジカ

シカ科には、キヨンやジャコウジカのように森林に生息する小型のグループ、アカシカやトナカイのように草原的な環境に生息する大型のグループがいる。前者は角が短く枝分かれしていないか、していてもごく単純な形をしている。後者では1mを超えるような長い角となり、複雑に枝分かれしている。

ニホンジカ（学名 *Cervus nippon*）は、それの中間的な性格を持っており、角は50cm前後で枝は4本と比較的単純である。夏毛はオレンジ色で鮮やかな白い斑点があり、優美なシカとされる。交尾期には1頭の体の大きなオスが数頭のメスを独占する交尾群を形成する。1度の出産で生まれる子は1頭である。

ちなみに、よく比較されるイノシシは多産であり、年に4、5頭を出産する。

ニホンジカは、国内では北海道のエゾジカ、本州・四国・九州に分布するホンシュウジカ、馬毛島のマゲシカ、屋久島のヤクシカ、慶良間諸島のケラマジカの5亜種に分けられる。北に生息するほど体が大きく、エゾジカで130kgほど、ホンシュウジカで80kgほど、ケラマジカは成獣でも40kgほどである。

ニホンジカの亜種は、かつて東アジア沿岸部を北はアムール川から、南はベトナムまで広範囲に分布していたが、現在はほぼ絶滅し、野生状態で生息する集団はいなくなっている。これに対して日本では個体数の増加にともない農林業への被害が問題となっている。

#### (2) 出生

ニホンジカの出産のピークは6月である。分娩が近づくと、妊娠メスは林の中などの目立たない場所へ移動する。普段は臆病なメスジカも分娩後は攻撃的になる。出生体重は、ホンシュウジカで5kg前後と推定される。

子ジカは生まれてしばらくは地面に伏せ

てじっとしている。子ジカは、朝、昼、夕方の3回授乳する。そのミルクは、固形分が21%で牛乳の1.6倍ほど、タンパク質は8.5%、脂肪も7.5%で牛乳の2~3倍も濃厚である。子ジカは徐々に草を食べるようになり、夏までに体重は10kgを超えるようになる。

シカの娘は母ジカのもとに留まるが、息子は角が伸びるようになると母のもとを去る。

### (3) オス

ニホンジカの社会は一夫多妻制である。オスは、息子として母ジカと過ごす1、2年、若者として過ごす数年があるが、この段階でメスを確保するナワバリを持つことはできない。体格が完成し、枝角も立派になり周囲のオスにケンカ負けしないようになる7、8歳から数年間は、数頭のメスを独占するナワバリを持つ。これを実行するうえでオスの角は重要な意味を持っている。

交尾期のオスは、メスの発情をチェックし、ナワバリ・オスはナワバリを誇示するために大きく鳴いたり、ナワバリに侵入する他のオスを追い出したりと、採食もできないほど忙しい。実際にほとんど食べない日もある。このため交尾期を過ぎたナワバリ・オスはやつれ果て、中には衰弱死する個体さえいる。

秋の体力を確保するために、オスは夏のあいだに栄養をとっておかなければならぬ。



茨城県鹿嶋市の鹿島神宮の「鹿苑」(11月初旬)。  
オス同士は、暇さえあれば枝角をぶつけ合い、カチャカチャと角の接触音を響かせている。

秋が近づくと首や胸が太くなり、遠目には胴体から首がひとつながりに見えるようになる。加えて交尾期になるとオスは泥浴びをするようになる。変化は身体の中でも起きる。精巣が大きくなり、雄性ホルモンのテストステロンが増加する。

### (4) メス

一生の間にたくさんの健康な子供を残すことはオスジカ同様、メスジカにとっても重要である。しかも、メスには出産後に子ジカを育てるという大切な役割がある。

ニホンジカの場合、0歳の妊娠事例は確認されていない。1歳では集団によって違いがあり、メスの栄養状態に影響される。メスの妊娠率は個体群の増減を左右するため重要な意味を持っている。2歳以降の妊娠率は80%以上と高く、集団によっては100%近いものもある。メスの繁殖生理はプロゲステロンという黄体ホルモンに支配されており、妊娠メスでは交尾後に急増し分娩前に減少する。

排卵は9月下旬から始まり、10月中旬が交尾のピークとなる。それまでオスとメスは別々に暮らしているが、この頃になると体の大きいオスがメス群に侵入し、その群れをまとめるようになる。

メスは発情オスの追跡を迷惑そうに逃げたり座り込んだりする。また、若いオスには反撃もある。しかし、発情期が訪れた日はオスを受け入れる。メスの発情は、2週間ほどの周期でめぐり1日しか持続しないため、オスはその間に交尾を試みる。

出産を迎える翌年6月初旬は、新緑の時期であり、植物のタンパク質含有率が高く良質なので、母ジカにとってこの時期の出産が最も都合がよい。

子ジカの世話には経験が重要な意味を持っており、若い母ジカは子ジカの隠し方や逃げるときの導き方などが未熟である。

食料事情のよくない場所では、出産・育児をしたメスは秋に発情しないことが多い。

#### (5) 角

シカの角の特徴は、成長が終わると血流が止まり、春に頭骨から離れて落角し、また新生する点である。

ヨーロッパでは、1817年にフランスの博物学者であるキュビエがシカの角が骨であることを示すまで、シカの角は木からできていると信じられていた。

前年の角が落ちる落角は、雄性ホルモンであるテストステロンに制御されており、春になると角座と角の間に離層ができ、そこから角が落ちる。テストステロンは、日の長さに影響を受けるため、実験的に光周期を半年ずらすと落角も半年ずれる。

新生する袋角はビロード状で、表面に微毛が生え、汗腺もあって汗もかく。内部に血管が走っており触ると温かく、また神経も走っているのでシカはとても大切に扱う。袋角の時期はケンカをするときも角を使わず、後肢立ちになって前肢で相手を叩こうとする。

なぜオスだけに角があるかをめぐって諸説あるが、オス同士の種内闘争の武器とする説が最も説得力があり矛盾が少ないという。

なお、トナカイにはメスにも角があることについては、次のようなトナカイの特殊性から説明されている。トナカイは冬にオス・メ



神奈川県川崎市の「夢見ヶ崎動物公園」のシカ舎に展示されている年齢別の角（左から順に1歳～5歳）。同動物公園は古墳群の上にあり、東方向には地名由来のJR南武線鹿島田駅がある。

ス混群を形成し、雪下に局在する地衣類（菌類と藻類の共生生物）を掘って食べる。このため、オスと互角に争って餌を得られるようメスも角を持つと考えられている。

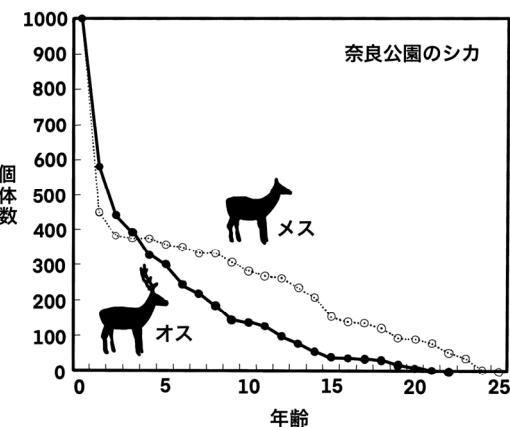
#### (6) 2つの個体群の生命曲線

高槻成紀は『シカの生態誌』でいくつかの個体群の生存曲線を示している。そのうちの2例を紹介する。

1つは奈良公園の例（図1）、もう1つは、気候の厳しい岩手県北上山地の五葉山（旧仙台伊達藩直轄林）の例（図2）である。

シカが天然記念物に指定されている奈良公園の例では、オスの生存曲線は急激に減少するL字型だが、メスの生存曲線は比較的なだらかである。オス・メス共通して子ジカの死亡率は高く、1歳までに半減する。平均年齢はオスが4.0歳、メスが5.9歳と大きな差があり、メスの最高齢は25歳である。

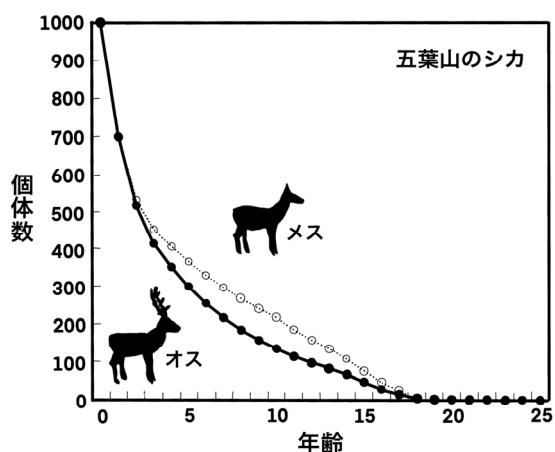
（図1）奈良公園のシカの生存曲線



（出典）大秦司「奈良公園のシカの生命表とその特異性」  
1976『シカの生態誌』より

五葉山の例では、オス・メスとも奈良公園の例に比べて、生存曲線は急カーブで減少している。ハンターによる子ジカを除く駆除や10年に一度の大雪等が死亡率に影響しているという。

(図2) 五葉山のシカの生存曲線



(出典)『シカの生態誌』より

### (7) 採食と食性

シカは草食の反芻獸はんすうじゅうである。植物の葉は、内部に栄養豊富な原形質を含むが、原形質は丈夫な細胞壁に囲まれており消化しにくい。そこで反芻獸は、臼歯でかみ碎いた植物片を反芻胃で発酵微生物によって発酵させ、再度口に戻して噛み碎き、反芻胃と腸を経由して分解と吸収を行う。なお、シカの反芻胃はウシに比べて未発達で腸も短いが、植物を選別的に摂取できるように口先が尖っている。

高槻成紀は、五葉山のシカの主食はミヤコザサであり、また宮城県牡鹿半島沖の金華山のシカの主食にアズマザサ、シバ、ススキをあげている。いずれもイネ科の植物である。

シカは1日どれくらいの量を食べるのか。農学部出身のジャーナリストである田中淳夫の『鹿と日本人』(2018)によると、「小ぶりなメスジカでも1日に5kg以上、オスジカは体格に合わせてさらに大食漢だ。」という。

補足しておきたい調査結果がある。令和2年(2020)年10月、6人の研究者グループが、シカの食性に関する新しい研究成果を発表した(詳細は国立環境研究所HP参照)。

それは、シカの食害により林床に餌資源となりうる植物がほとんどない研究林で、なぜ

シカは生き抜いているのかを解明するものだった。季節別の糞と植物のDNA分析から、シカが何を食べているのかが調査された。

その結果、次の記者発表のタイトルのとおり、「森のシカは、夏は落ち葉を、冬は嫌いな植物も食べて生きぬく」ことを明らかにした。

これにより、植生の崩壊によって餌資源がないように見える同様の森林でも、シカが生き延びるメカニズムの一端が示された。

### (8) 人の多いところでは夜行性

前出の田中淳夫『鹿と日本人』によると、シカは人が多いところでは夜行性となり、主に早朝や夕方に人家や農地近くに出没する例が多いという。ただし、これとは正反対に奈良公園のシカは日中に森から出て草地や市街地へ足を運ぶようになっているともいう。

また、同書で田中は、奈良公園のシカは保護されているが、飼われているわけではなく、実は周辺農家との間に長い軋轢の歴史があることも紹介している。

### (9) 鳴き声

動物の鳴き声を文字で表現するには限界があるが、シカの鳴き声は、筆者にはメスは鳥のようにピーピーと鳴き、オスの鳴き声は長く続くヴォーとポーの中間音に聞こえる。

尺八の代表曲に『鹿の遠音』があるが、オスジカの鳴き声を楽器音に喻えるなら哀愁を帯びたソプラノサックスの音に似ている。

### (10) アニメで知るシカの生態

筆者は情報収集の過程で、あるアニメに衝撃を受けた。ディズニーの『バンビ』(1942)である。子供向けのファンタジーと思いきや、その逆で突飛な設定や過剰な擬人化を抑えて、シカの生態を忠実丁寧に描いた名作だった。

## 5. 鹿と日本人

### (1) 旧石器時代

まず、時を旧石器時代まで遡ってみたい。日本列島全域に多数の遺跡がいっせいに形成されたのは、少なくとも4万年前の旧石器時代になるという。考古学者である佐藤宏之の「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座 日本歴史第1巻』(2013)を参考に当時の列島の形と動物相の変化を概観してみたい。

#### ○旧石器時代の日本列島の姿

旧石器時代は、地質学上第四紀更新世の氷期に属し、少なくとも100m以上の海面低下があった。このため、現在の北海道は、アジア大陸と陸で繋がる半島（古北海道半島）を形成していた。他方、海面が低下しても、海底の深い津軽海峡と対馬海峡は、狭まったとはいえ更新世を通じて存在し続けており、現在の本州・四国・九州は、1つの陸塊（古本州島）を形成していた。また、琉球諸島は、海面低下により陸域は多少拡大したが、それでも基本的に島嶼のままであった。

#### ○動物相の変化

ナウマンゾウやオオツノシカといった大型哺乳類は最寒冷期（2万3000年前）には絶滅し、一方バイソンやウマなどは晩氷期の開始（1万6000年前）とともに姿を消したと推定されている。この二つの動物群に属する大型哺乳類は、大規模な気候変動と時期を同じくして絶滅した可能性が高い。この時期以降に残された動物相が、縄文時代以降今日まで続く日本列島の動物相の基幹を構成した。

こうした大型哺乳類の絶滅前後の動物相と当時の海岸線を分かりやすく示した図があるので引用する（図3、4）。

大型哺乳類の絶滅後の穴を埋めるように3種の有蹄類、すなわちニホンジカ（シカ科）、

（図3）2.5万年前から1.5万年前までの時期の動物相を代表する中・大型哺乳動物と推定される当時の海岸線



（出典）河村善也「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」(1985)より筆者複製

（図4）1万年前以降の時期の動物相を代表する中・大型哺乳動物（海岸線は現在のもの）



出典は図3と同じ。筆者複製

イノシシ（イノシシ科）、ニホンカモシカ（ウシ科）、そしてツキノワグマが、本州・四国・九州における最大の哺乳類となった。このうち、シカとイノシシは生息数が特に多く、最も重要な陸上狩猟獣となった。

### ○旧石器時代の独自文化

佐藤宏之は、『旧石器時代 日本文化のはじまり』（2019）の中で、旧石器時代の古本州島の世界的に類例を見ない3つの独自文化を指摘している。それは、環状集落、<sup>きょくぶさませい</sup>局部磨製石斧、そして落し穴獵である。

環状集落とは、複数の石器ブロックが円形に分布する集落であり、旧石器時代前半期前葉に出現する。これは、春から秋にかけて狩猟活動のために分散して生活していた集団が、冬季に集まって相互訪問・祭り・婚姻などを行う季節的集落だった。

局部磨製石斧とは、刃部だけを研磨した石斧であり、森林環境に適応した独自の石器である。旧石器時代前半期の局部磨製石斧は、北オーストラリアに類例が認められる以外に発見例がない。

落し穴獵は、世界中に見られる罠獵の一種であるが、旧石器時代の例は日本だけである。落し穴獵には、見回りや補修が必要であり、定着的行動によってはじめて利用可能となる。その構造は捕殺でなく生け捕りを狙ったものだった。この世界最古の落し穴獵は、旧石器時代から間断なく近代まで行われた。

## （2）縄文時代

考古学の時代区分によると本州島の縄文時代は、マンモスが絶滅する1万6000年前から2千数百年まで続くことになる。

西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』（2010）を参考に、食料としてのシカ、シカ製品を紹介する。

### ○食料としてのシカ

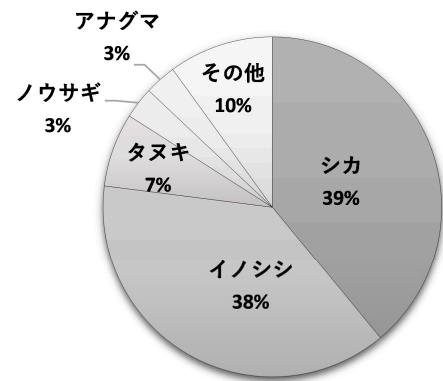
縄文時代に陸獣で最も多く食べられたのはシカとイノシシである。シカとイノシシの両方が生息する東北から九州にかけての全遺跡でのシカ・イノシシの出土割合は8割弱となり、この中でシカとイノシシの比率はほぼ半々である（図5）。

地域的なシカとイノシシの比率をみると東北地方ではシカの方が多く、九州ではイノシシの方が多い傾向にある。関東から中国地方はほぼ同程度である。

北海道にはイノシシは自然分布していないため、北海道の陸獣狩猟の中心は縄文時代を通じてシカであった。一方、沖縄ではイノシシは自然分布するが、遺跡からシカは出土していない。沖縄においてもイノシシはさかんに利用されたようである。

ちなみに、日本最古の家畜は、約1万年前頃のイヌである。縄文遺跡からは、ネコも二ワトリもウマもウシも出土していない。

（図5）縄文時代の陸獣の出土割合



（出典）『事典 人と動物の考古学』より

### ○シカ製品

縄文時代には、シカの角や骨を用いた骨角製品が多く使われた。たとえば、角製の釣り針や鉤先・針・装飾品などである。生の角は石や骨よりも柔らかく木よりも強い特徴がある。シカの毛皮が衣類等に用いられたのは明

らかだが、その証拠は残っていない。

鈎は、魚類や海獣類を突き刺して捕える道具であり、刺した鈎先が柄から離れて獲物の体内に残って漁師と索（革製の紐）でつながる。また、ヤスは、魚を突き刺して挟んで捕える道具である。ヤス先が木の柄に固定されている点で鈎と異なる。縄文時代はシカ角製が多く、ヤス先が三本セットのものは、シカの中手骨か中足骨で作られたものが多い。

シカ角製の釣り針について西本豊弘が、興味深い話を紹介しているので抜粋する。

「鹿角で釣り針を作つて実際に魚を釣つたことのある知人によれば、生の角では匂いがするのでよく釣れるが、落角で作った釣り針では匂いがしないので釣れないという。鹿角も正確にいえば枯死した骨であるが、落角よりはコラーゲンの残存率が高いのであろう。角の匂いが、釣り針そのものを餌として魚をおびきよせる疑似餌の働きをしているのかもしれない。」

#### ○弓矢の出現とシカ骨製の弓弾

弓矢の矢尻と考えられる石鏃は、縄文時代草創期の後半、約1万4000年前頃から多くなり、弓矢が狩猟用具の中心となる。弓矢は、持ち運びの利便性、狩猟具としての精度や威力の面で、手槍や投げ槍よりも優れていた。

縄文時代に多く出土するイヌガヤ（イチイ科の針葉樹）製の丸木弓（木から削り出して作る弓）を使用した実験では、10m程度の近距離からニホンジカの肩甲骨を貫通し、十分な威力が確認されている。

ちなみに、弓道の専門家である松尾牧則の『弓道 その歴史と技法』（2013）によると、長野市宮崎遺跡から出土した縄文晩期のやや長めの弓には、弦受けとしてシカ骨製の長さ6cmの弓弾（弓筈）があるという。

### (3) 弥生時代・古墳時代

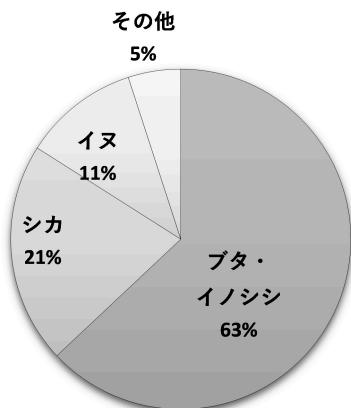
弥生時代は2千数百年前に始まり、古墳時代は古墳が現れる3世紀頃に始まる。

この時代も西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』（2010）を参考に、食料としてのシカ、銅鐸のシカ、埴輪のシカを紹介する。

#### ○食料としてのシカ

弥生時代は、縄文時代に引き続きシカ・イノシシ猟が行われるもの、狩猟は次第に農耕の片手間で行う仕事になる。さらに古墳時代以降、狩猟で捕獲される哺乳類の総量は減っていく。弥生時代に起こった大きな変化は、人々が家畜のブタを食べるようになったことである（図6）。

（図6）弥生時代の陸獣の出土割合



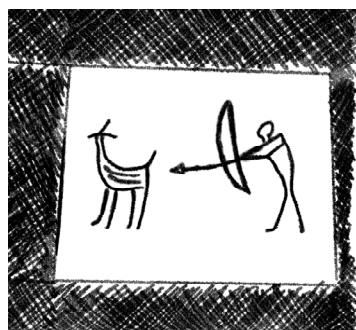
（出典）『事典 人と動物の考古学』より

#### ○銅鐸のシカ

青銅器製の銅鐸は、弥生時代前期末（紀元前5世紀）から後期（2世紀）まで作られた。銅鐸は祭りのベル「聞く銅鐸」として始まり、大型化して「見る銅鐸」として終わる。

絵画のある銅鐸は60個ほど確認されており、人物に関しては、弓を引く人、魚を捕る人、脱穀する人、争う人と仲裁する人、矛と盾を持つ人などがある。

シカは200頭以上描かれており、その大多数はメスジカである。シカの頭はVの字で表現され、角の有無でオス・メスが描き分けられている。

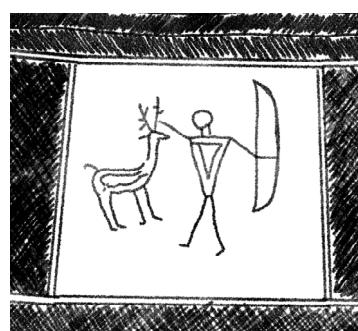


弓を引く人  
国宝の伝香川県出土銅鐸 B面の絵画から模写



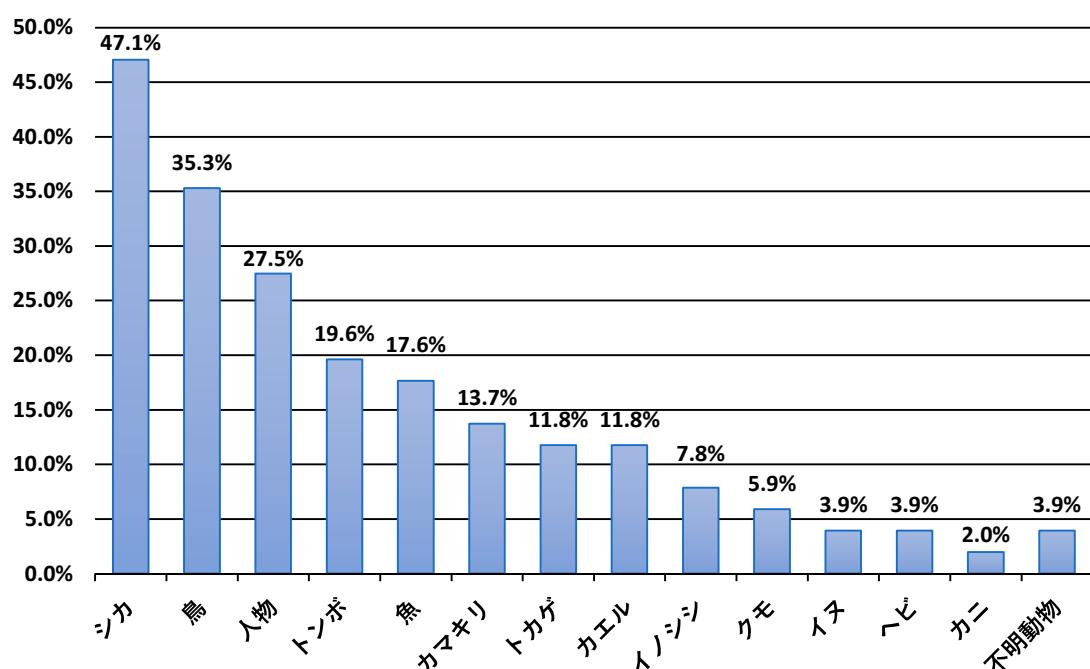
メスジカの頭をおさえる人  
兵庫県の桜ヶ丘 4号銅鐸 B面の絵画から模写

(図7) は、平成3（1991）年当時に絵画のある銅鐸（総数51個）に描かれた動物の割合を示したものである。約半数（24個・47.1%）の銅鐸にシカが描かれ、その割合は動物中最多くあり、人物（14個・27.5%）を上回る。



オスジカの角をもつ人  
兵庫県の桜ヶ丘 5号銅鐸 A面の絵画から模写

(図7) 銅鐸に描かれた動物の割合



（出典）春成秀爾「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』1991（『事典 人と動物の考古学』）より筆者加工

農耕の割合が増す弥生時代になると、シカの狩猟獣の側面に作物を荒らす厄介な害獣の側面が加わる筈である。前頁の桜ヶ丘4号銅鐸、同5号銅鐸の2つの絵を眺めると、筆者には、人がしたたかに「我々の方が一枚上手だ」と、シカを抑え込んでいるように見える。

そんなシカだが、図7のとおり、銅鐸の画題の頻度は、同様に狩猟獣・害獣の両面をもつイノシシとは比べ物にならないほど高い。

ところで、前出の松尾牧則の『弓道 その歴史と技法』(2013)によると、銅鐸に描かれた弓は、日本最古の弓の絵であり、弓道家はその握りの位置に注目しているという。

現在、民族の伝統的弓を保持し続ける国は、モンゴル、韓国、日本の3か国に限られる。世界の弓は、モンゴル・韓国をはじめ既に廃絶した弓を含めて短弓であり、握りの位置が中央にある。これに対して日本の弓は長弓であり、握りの位置が弓の中央より下になる短下長上といわれる特徴をもっている。

松尾は、同書で今後の調査研究に期待を込めて次のように述べている。

「縄文後期から弥生時代には、すでに短下長上でやや長く、補強や装飾を施された弓を使用していたと考えることができるが、新たな出土品などによって、さらに当時の弓矢の実態が明らかになっていくことを期待する。」

## ○埴輪のシカ

埴輪は古墳に配置されていた素焼きの土器である。埴輪のシカは、角の無いメスジカが多く、角のあるオスジカは意外に少ないという。振り返る姿のシカは、周囲の気配に敏感なシカの生態を表している。

右上の写真は、群馬県高崎市の保渡田八幡塚古墳に屋外復元されている埴輪の一部である。配置も色彩も当時のままに鮮やかに復元されている。狩人の顔の入墨は、魏志倭人伝

にいう「げいめんぶんしん男子は大小となく、皆黒面文身す。」に符合している。

埴輪の人物や動物は、まるで子供向け玩具のように、どれも丸みを帯びた優しい姿をしている。



群馬県高崎市の保渡田八幡塚古墳の屋外復元埴輪。  
狩人の前には、矢に当ったイノシシがいる。

下の写真は「見返りの鹿」と呼ばれる埴輪である。「見返りの鹿」は、奈良県橿原市の奈良県立橿原考古学研究所付属博物館、島根県松江市の島根県立八雲立つ風土記の丘、静岡県浜松市の市民ミュージアム浜北の3カ所で見ることができる。

3体とも左向きに振り返っている点で共通する。奈良の「見返りの鹿」はメスジカであり、島根と静岡はオスジカである。島根の



静岡県浜松市の市民ミュージアム浜北「歴史資料館」に  
展示されている「見返りの鹿」(浜松市博物館所蔵)。

「見返りの鹿」は重要文化財認定されており、静岡の「見返りの鹿」は発掘時期が平成9(1997)年と最も新しい。

#### ○鹿の被り物をつけた人物埴輪

下のイラストは、茨城県下妻市ふるさと博物館所蔵の「鹿の被り物をつけた男子」と名付けられた埴輪（右）とその復元図（左）の模写である。

下妻市埋蔵文化財調査報告書第12集(2017)によれば、この埴輪は、平成27～28(2015～2016)年に行われた工業団地の造成工事にともなう千草B古墳群の埋蔵文化財調査により発掘された。14基ある古墳群のほとんどが昭和30年代の盗掘、乱掘により壊滅状態にあり、今回出土した埴輪は、削平により墳丘を失っていた3号墳の周溝に落ち込んでいたものだという。

貴重な発見である。というのも、鹿の角の被り物をつけた人物埴輪は、茨城県桜井市で発掘された「<sup>ひざまづ</sup>く人物埴輪」に続き2体目

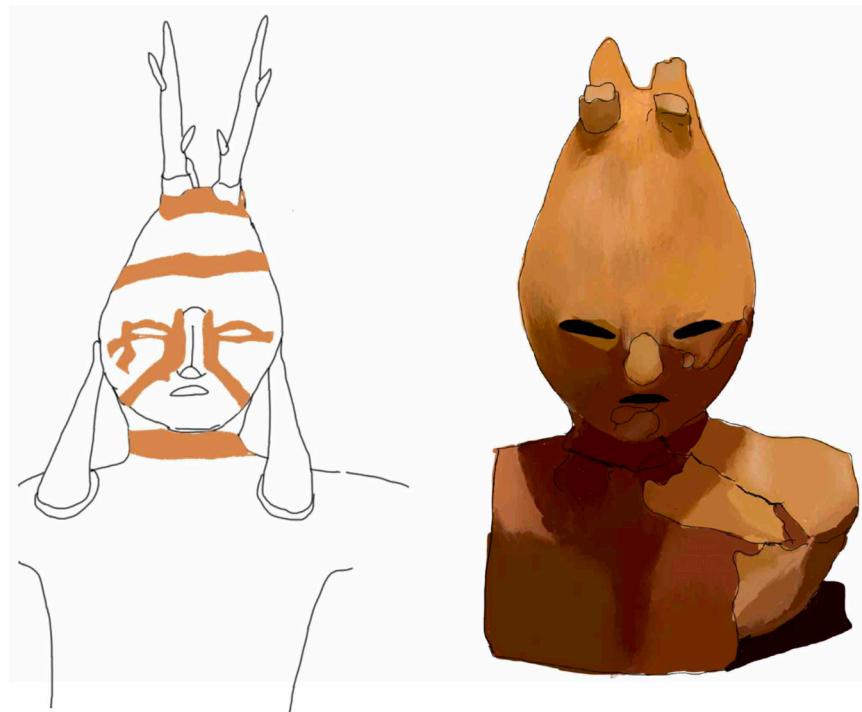
だからである。

埴輪の角部分は欠損し形状不明だが、被り物の前側2つの突起は、別造りの粘土棒が孔に差し込まれたものであり、2本の角の基部は前から見てV字型に上に向かって開き、横から見て後方にやや傾いて生えている。突起の形状から前側2つの突起は角、後側2つの突起は耳を表現したものと認定された。また、顎や腕の角度などから立位とされ、男性の髪型である美豆良の基部がこめかみに接合していることなどから男子とされた。

この埴輪が、何をしている姿を表したものかは分からぬ。しかし、人が何の理由もなく鹿に扮する筈もなく、何らかの意味が込められていることは確かだろう。

仮に、鹿に扮する目的が、祈りや儀式に伴うものであれば、その鹿は特別な意味をもつた靈獸であり、時を超えて宇和島の八ツ鹿踊りやそのルーツとされる岩手県・宮城県の鹿踊りに通じることにもなろう。

とはいえ、この埴輪を踊りと結びつけるに



茨城県下妻市ふるさと博物館所蔵の「鹿の被り物をつけた男子」  
復元図（左）と埴輪（右）、いずれも筆者模写。

は早過ぎる。ここは銅鐸に描かれた日本最古の弓の絵の握りの位置に注目する弓道家の態度に倣い、新たな「鹿の被り物をつけた人物埴輪」の出土により実態が明らかになっていくことを期待したい。

#### (小括)

シカの生態を知ると、あらためて宇和島の八ツ鹿踊りは、単に外形上鹿面を頭上に載せて鹿に扮しただけでなく、シカの生態を巧みに取り込んだ芸能であることが分かる。

たとえば、行方不明のメスをオスの群れが探し当てる「雌鹿隠し」の歌詞は、メスと別群で生息していたオスの発情期の訪れをほのかな恋の季節の訪れに書き換えている。

また、メス1頭にオス複数頭という設定は、オス同士の非接触で対峙し合う独特的の踊りのステップで恋のバトルを暗示させ、メスを1頭に絞ることで乱婚要素をきれいに除去している。

ハイトーンボイスを長く伸ばす独唱部分はオスの鹿鳴の特徴を反映しており、締太鼓の縁を撥でカチャカチャと鳴らす音は、オス同士が角をぶつけて争う接触音を暗示させる。

本来、生々しい動物の生態を上品に仕立て直して取り込んでいるのである。

なぜ、このような芸能が成立したのだろうか。考えられるのは、1つには作り手の上品な感性であり、もう1つはシカの生態に触れる日常の存在ではなかったろうか。

さて、シカの生態とともに鹿と日本人の関わりを旧石器時代から辿ってみた。

旧石器時代から縄文時代は、シカはイノシシとともに主たる陸上狩猟獣であり、シカの角や骨から狩猟製品や装飾品も作られ、毛皮は衣類などに用いられた。まさにシカは生活を支える狩猟獣であり実用獣だった。

弥生時代から古墳時代は、農耕の割合が増え家畜のブタを食べるようになるにつれ、シ

カの狩猟獣・実用獣の側面は弱まり、厄介な害獣の側面が加わった筈である。

そうした中で興味深いのは、銅鐸に描かれた動物の最多はシカであり、そのうちメスが多く、また埴輪のシカもメスが多いことである。あえて角という特徴がない方のメスジカを銅鐸に描き、埴輪を作るということは、この時代の人々は、オスジカよりもメスジカに関心を寄せていたことを窺わせる。

冬季のシカを肉とみれば、痩せたオスジカより、栄養を蓄えたメスジカに関心が向かうのは自然である。

あるいは、江戸時代の人々が犬にあやかつて安産祈願を始めたように、毎年出産を重ねるメスジカの旺盛な生命力にあやかろうとしたのだろうか。少なくとも、当時の乳児死亡率はシカ並みに高かったことは疑いない。

いずれにせよ、シカの個体数の増減を左右するのは、メスジカの妊娠であることは、今も昔も変わらない。

次回は、奈良時代以降の鹿と日本人の関わりを取り上げる。

#### (参考資料)

- ・福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄 編『日本民俗学大辞典 上』(吉川弘文館・1999)
- ・高槻成紀『シカの生態誌』(東京大学出版会・2006)
- ・田中淳夫『鹿と日本人 野生との共生1000年の知恵』(築地書館・2018)
- ・中濱直之・古田智博・安藤温子・鈴木節子・高柳敦・井鷺裕司「森のシカは、夏は落ち葉を、冬は嫌いな植物を食べて生きぬく」(国立研究開発法人国立環境研究所HP・2020年10月15日)
- ・佐藤宏之『日本列島の成立と狩猟採集の社会』『岩波講座 日本歴史第1巻 原始・古代1』(岩波書店・2013)
- ・河村善也『最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷』『月刊地球』(海洋出版・1985・72号)
- ・佐藤宏之『旧石器時代 日本文化のはじまり』(敬文舎・2019)
- ・西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』(吉川弘文館・2010)
- ・松尾牧則『弓道 その歴史と技法』(日本武道館・2013)
- ・下妻市埋蔵文化財調査報告書第12集「千草B古墳群下妻市高道祖字千草地区工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」(下妻開発公社・茨城県下妻市教育委員会・毛野考古学研究所・2017)